加藤晴生さんメモリアル・コンサート

2025年2月2日（日）

場所：タワーホール船堀（小ホール）

加藤晴生

皆様本日はお寒いところこの会場に足をお運び頂きありがとうございます。

このメモリアルコンサートを開いてくださる案を出して下さった方々にも御礼を申し上げます。

ラトビアとの関係は、最初は稲門グリークラブの演奏旅行で行ったことで、それもグリークラブの幹事会ではニューヨークを候補にしていましたが、ふと目にしたテレビ放送でラトビアの独立間もない様子を自分の目で見てみたいと方向転換しました。訪れたラトビアでジンタルスという女声合唱団と合同演奏したのが、その声の美しさに稲グリメンバーは驚いたと言われています。その後ジンタルスを二度東京に招き東京公演をしましたが、合唱を志す日本の女性たちはその合唱の美しさ・力強さに驚きました。

日本の人々にラトビアの情報を、ラトビア語を、ラトビアの歌を広めたいという願いで日本ラトビア音楽協会を設立しました。やがて音楽協会付属合唱団として『ガイスマ』が誕生しました。以来今日まで『合唱団ガイスマ』は活躍を続けています。

皆様酷寒の時期、暖かいこの会場でごゆっくり演奏をお聴き下さいます様お願い申し上げます。

加藤民子

Program

セレモニー

黙祷
式辞
感謝状贈呈

稲門グリークラブ・シニア会　指揮：耕納邦雄 / ピアノ：佐藤美佳

男声合唱による「日本抒情歌曲集」林 光 編曲 より

浜辺の歌　（作詞：林 古渓 / 作曲：成田 為三 / 編曲：林 光）
中国地方の子守歌　（日本民謡 / 作曲：山田 耕筰 / 編曲：林 光）
早春賦　（作詞：吉丸 一昌 / 作曲：中田 章 / 編曲：林 光）
叱られて　（作詞：清水 かつら / 作曲：弘田 龍太郎 / 編曲：林 光）
待ちぼうけ　（作詞：北原 白秋 / 作曲：山田 耕筰 / 編曲：林 光）

KORIS GAISMA 合唱団ガイスマ　指揮：佐藤 拓 / ピアノ：坂本雅子

Pacel galvu baltā māt　（作詞：Jānis Peters / 作曲：Raimonds Pauls）
Gaismas pils　（作詞：Auseklis / 作曲：Jāzeps Vītols）
Mūsu Tēvs debesīs　（作詞：Andrejs Eglītis / 作曲：Lūcija Garūta）
Manai dzimtenei　（作詞：Jānis Peters / 作曲：Raimonds Pauls）

合同演奏

風よ、そよげ “ Pūt, vējiņi ”　（ラトビア民謡 / 訳詞：加藤民子 / 編曲：Andrejs Jurjāns）
遙かな友に　（作詞・作曲：磯部 俶）

稲門グリークラブ・シニア会

早稲田大学グリークラブのOB演奏団体「稲門グリークラブ」中、還暦すぎのものだけから成るのが「シニア会」です。高齢化が進み平均年齢も85を過ぎた今も少人数ながら男声合唱を楽しんでいます。

指揮：耕納邦雄　　ピアノ：佐藤美佳

テノール１	テノール２	バス１	バス２
石原祥弘 ★	三雲孝夫 ★	浅妻 勲 ★	秋永 基 ★
清水 実 ★	白井 猛 ★	児玉昌久 ★	武内久明 ★
		三宮 晨	福島 敬 ★
		千葉 守 ★	

★ は出演者

KORIS GAISMA　合唱団ガイスマ

合唱団ガイスマは、バルト三国の中央に位置するラトビアの合唱曲を専門に歌う混声合唱団です。日本ラトビア音楽協会の2008年歌の祭典視察旅行に参加したメンバーを中心に設立され5年に一度開催されるラトビアの国家行事「歌の祭典」に参加することを目的として活動している団体です。2024年1月には日本ラトビア音楽協会の傘下を離れ、自立した合唱団として活動を始めました。

KORIS GAISMA

指揮：佐藤 拓　　ピアノ：坂本雅子

ソプラノ	アルト	テノール	バス
アジズ幸子 ★	Jekaterīna Golubkova ★	岩松廣行	石井洋一 ★
荒舩禎子 ★	植木佐代	大城 陽 ★	倉林公夫 ★
石井由美子 ★	菅家敬子 ★	山下大輔 ★	児玉昌久 ★
大城あずさ ★	木山はるか ★		福地裕彦 ★
金川貴子 ☆	串田百花 ☆		
亀田亜希子 ★	熊木佳枝 ★		
叀子岐子 ★	桜井珊子 ★		
清水とよみ	桜井典子 ★		
田村理恵	髙田万里 ☆		
中村友子 ★	難波華子 ☆		
福地裕子 ★	根岸恵子 ★		
前原育子 ★☆	細見純子 ★☆		
山田祐子 ★	堀江二葉 ★☆		
山根明日香 ★	目次奈々 ★		

★ は出演者
☆ は遠隔地会員

Honoring Haruo Kato

Pēteris Vaivars

A True Friend of Latvia and Bridge Builder Between Cultures

For more than three decades, Haruo Kato was a passionate advocate for strengthening the bond between Japan and Latvia through music. His extraordinary dedication to Latvian music and culture has left an indelible mark on both nations, earning him admiration and love from all who knew him.

A key figure in the Japan-Latvia Music Association, Haruo Kato was instrumental in fostering cultural exchange between the two countries. His love for Latvian choral music shone brightly as a member of the Japanese choir Gaisma ("Light"). With unwavering commitment, he inspired others to embrace and cherish Latvia's rich musical heritage, sharing its beauty with audiences far beyond its borders.

Haruo Kato's connection to Latvia went beyond admiration—it was a relationship built on respect, understanding, and participation. He visited Latvia countless times, often as a singer at the Latvian Song and Dance Festival, one of the nation's most cherished and prestigious cultural events. His presence at these festivals symbolized the universal power of music to unite people and cultures.

Beyond his contributions to cultural exchange, Haruo Kato played a pivotal role in Latvia's early diplomatic presence in Japan. During my tenure as Latvia's first Ambassador to Japan (2006–2013), he generously shared his extensive knowledge and network of contacts. His efforts extended well beyond cultural matters, offering vital support in strengthening bilateral ties at a critical stage of their development. His work was invaluable in helping to establish a strong foundation for the relationship between the two nations.

Those who had the privilege of meeting Haruo Kato remember him not only as a brilliant musician but as a warm, kind, and generous soul. His friendship with Latvia and its people was genuine, heartfelt, and enduring. He embodied the values of mutual respect and cultural appreciation, building bridges that transcended distance and language.

Today, as we honor Haruo Kato's remarkable life, we celebrate a legacy of love and connection. His efforts have brought Latvia and Japan closer together, ensuring that the light of Latvian music shines brightly across the world.

Haruo Kato was a cultural Ambassador of Latvia long before Latvia Embassy was established in Tokyo in 2006, a true friend of Latvia, and an extraordinary human being. His work will continue to inspire future generations, reminding us all of the profound impact one person can have in building understanding and friendship between nations.

Dear Kato-san, Your light will forever illuminate the path of cultural harmony.

Pēteris Vaivars
Ambassador of Latvia to Japan (2006-2013)

加藤さんを偲んで

アイラ・ビルジニャ

日本の皆さまへ

ラトビアと日本はこの冬大切な方を失いました。ラトビアの私たちは加藤晴生さんの訃報を深い悲しみをもって受け止めました。この訃報で、加藤さんが30年間にわたって日本とラトビアの文化交流に尽力を捧げてきたことを改めて思い返しております。

1993年に初めて女声合唱団ジンタルスと早稲田大学稲門グリークラブが出会いました。交流を続けたいという気持ちがお互いの合唱団に生まれ、演奏旅行や合同演奏を行ってきました。それ以来ラトビアと日本の両国で多くのコンサートや企画が行われてきました。日本でラトビア人作曲家の音楽が普及することは文化交流の拡大の重要な方法の一つです。現代のラトビア人作曲家の作品は日本の合唱団の演目に入っています。ラトビア音楽は毎年日本のどこかのコンサートで演奏されています。ラトビア音楽と文化を日本で普及させるために、日本の仲間たちとともにこれほどまでに広い文化交流に尽力された加藤さんに敬意と感謝の念を改めて表します。

合唱団ガイスマについても特別な歴史があります。ラトビアの合唱音楽を歌うために作られた世界的にも珍しい合唱団です。世界中から集まった在外ラトビア人の合唱団とともに、ガイスマは何度もラトビア歌と踊りの祭典に参加し、5年に一度1万6000人の大合唱団の中でラトビアの歌を歌ってきました。これは驚くべきことです。

両国民が歩み寄るために、多くの活動を企画してくださった加藤晴生さんと仲間である皆さんのご貢献に改めて感謝と尊敬の念を表明します。

加藤さんのご夫人である民子さんとご家族、加藤さんの訃報に心を痛めている方々に、心からお悔やみを申し上げます。

日本とラトビアの交流が今後も続き広がっていくために、これまでの仕事と道を続けていければと思っております。

深い感謝の念を込めて

女声合唱団ジンタルス
リーガ大聖堂少女合唱団“ティアラ”
指揮者
アイラ・ビルジニャ

翻訳：堀口大樹

加藤さんを偲んで

上野慶三

私は、2000年にLatvia訪問しましたが、名前も何処に有るかも分からず、地図を見て「この国は生涯絶対に自費で行けない」と言う理由だけで招へいを受けましたが、美しい国と温厚勤勉な国民に魅せられて、互いに学び合い、友情を育み合って今日に至ります。ラトビア訪問すると、親日国・自然豊かな国・歌と踊りの国に魅せられました。

①312mの山が一つしかないのに、12,000以上の川が有り、2,256の湖が有る世界で最も貴重な薬草や樹木に適した湿地帯の自然豊か美しい国。
②火薬庫戦争博物館の日の丸とバルチック艦隊撃沈の地図が掲示される程の親日国。
③そして2003年に見た音楽祭です。パレードと歌の祭典を見た時には感動しました。1873年からドイツやソ連に侵略されている時も開催され、ラトビア人の魂と誇りとラトビア語を継承してきた祭典に魅了されました。

2008年この祭典で日本の祭りの法被を着た人達が、Mežaparks公園の前夜祭会場に居たのです。飛んで行って挨拶したのが、加藤さんでした。親しく声を掛けて頂いて、その場で旧知の友のように互いのラトビアを話し合った日が忘れられません。

加藤さん達は何と歌の祭典に参加して15,000人のラトビアの魂の叫びの歌を日本人がラトビア語で一緒に歌いました。私は日本チームの前の最前列で声援し感激感動、感涙でした。翌日のパレードでは日本から参加と大きく紹介されて、大拍手の中を加藤さん達が行進するのを日本人として誇りに思いました。

2013年、2018年、の音楽祭でも日本ラトビア音楽協会として参加し、パレードと歌の祭典の加藤さんの姿、親日国ラトビアは日本チームに大喝采でした。2023年、加藤さんの居ないパレードは寂しい限りでした。

日本では、ラトビア大使館やラトビアイベント等催しで、音楽協会のラトビア国歌を聞くのが一番嬉しいです。加藤さんに、今日もラトビア国歌を有難うとお礼を言うと『私たちは音楽で、上野さんは貿易経済で、共にラトビアの為に頑張りましょう。』といつも仕事を気に掛けて励ましてくれました。ラトビアの名前すら知らない人が多い頃から、加藤さんの音楽協会と我々のラトビア協会が共に手を組みラトビアの為の活動で今日のラトビアとの親善親睦交流が育まれて来ました。

音楽協会とラトビア協会が今日まで仲良く共に歩めたのは加藤さんのお人柄に尽きます。尊敬する大先輩の加藤さんと、ラトビアで、東京で、2人だけで何度か食事をしました。笑顔でラトビアを語る加藤さんの姿に意気を感じ、加藤さんとラトビアを語り合い、一緒に歩めた事は私の人生の糧であり誇りです。

有難うございました。
心からご冥福をお祈り申し上げます。

2024年令和6年12月
Riga Wood Japan
代表取締役社長
上野慶三

2013年7月6日
ラトビア歌と踊りの祭典会場《Mežaparks》にて

加藤さんを偲んで

松原千振

雪の日のヘルシンキで
― 加藤晴生さんとの出会い ―

1992年も残り少なくなった12月初旬、南フィンランドは雪深い毎日であった。北欧の厳しい自然はまた美しい自然も創り出すことを証明するような日々。加藤さんがフィンランドを訪問されたのはそんな頃であった。丁度一年前には旧ソ連の時代が終わり、まだ不安定さも残ってはいたが、どこか明るさを感じさせる雰囲気もあるように思われた。

加藤さんとは滞在されていたホテルでお会いし、稲門グリークラブの北欧演奏旅行の話をした。彼は北欧の男声合唱事情をたずね、私は少なくとも一曲は現代合唱作品をプログラムに入れることを勧めた。シベリウスの国を訪問することを意識されていた加藤さんはどのような作品が適切なのか、熱心に尋ねてきた。主催するヘルシンキ大学男声合唱団（YL）が現代作品に取り組んでいることを話すと、心を動かされたように日本の男声合唱作品についても意見を求め、私は間宮芳生の作品を提案した。稲門グリーは「コンポジション３番」をプログラムとし、その演奏により、1995年間宮芳生のコンポジション14番をヘルシンキ 大学男声合唱団が委嘱するとこに繋がった。

どれほどの時間話したか正確に覚えていないが、この後三井物産ヘルシンキ支社の雑賀（さいが）さんも合流し、彼のご自宅に招かれた。まずサウナ！そして夜半に至るまで話が続いたことだった。

雪深いヘルシンキでの会合は、それから30年以上経って思い出してみると不思議な出来事の連続の始まりだった。ヘルシンキ 大学男声合唱団来日公演の実現、稲門グリー、早稲田グリーの北欧公演ラトヴィア女声合唱団ジンタルスの来日、そして日本ラトビア音楽協会の設立…等、いつも加藤さんの存在があった。心からの感謝と敬意を捧げたいと思う。

Requiescat in pace. 霊よ、安らかに。

合唱指揮者
松原千振

加藤さんを偲んで

堀口大樹

加藤さんのラトビア語面での右腕として

加藤さんとの出会いは、私が大学4年生だった2006年9月、インターネットで見つけた日本ラトビア音楽協会の創立2周年を記念したパーティーにさかのぼる。会の余興として私はラトビア語で自己紹介を兼ねたスピーチをしたのだが、そこで加藤さんの“目に留まる”ことになった。後年、加藤さんが時折私や周囲に話してくれたのだが、私がラトビア語のスピーチをして、その後協会に入会した時に「空から天使が降ってきた」と思ったそうだ。

この時以来私は、日本とラトビアの交流に奔走する加藤さんから、協会の様々な活動をラトビア語面で任せてもらえるようになった。協会の活動における通訳や翻訳、ラトビアの音楽関係者とのメール、時には電話でのやり取り、駐日ラトビア大使館でのラトビア語教室の講師、合唱団ガイスマでの言語指導など…。なお、自分が初めてラトビア語で通訳として報酬を頂ける仕事をしたのも（2006年指揮者のアイラ・ビルジニャのNHK児童合唱団での指揮）、通訳の仕事でラトビアに行かせてもらえたのも（2007年指揮者の山本健二氏のリーガ大聖堂少女合唱団での指揮）、加藤さんの配慮があったからである。独学でラトビア語を学んでいた私にとって、ラトビアとの関わりやラトビアを通じた人々との関わりは加藤さんのおかげで広がり、かつ濃厚なものとなった。日本にいながらにして私のラトビア語力も日進月歩で向上した。加藤さんが私のことを必要としてくれたことは、当時成長過程だった自分の心の支えにもなっていたように思う。

加藤さんとは協会の活動に関して時間帯を問わず頻繁にやり取りをしたが、2006年から2018年頃までの電話の通話履歴は自分の両親よりも加藤さんとの方が多かっただろう。当時、自分の祖父母と同じくらい年が離れた人と関わることはあまりなかった。孫や息子でもなく、職場の部下でもない自分のことを可愛がり、育ててくれた加藤さんとの縁をありがたく思うと同時に、このめぐり合わせを不思議に思ったことも何度かある。加藤さんからは、物事の段取りや周囲への気配りの大切さなど、多くのことを学んだ。ラトビア語面において加藤さんの右腕として働かせてもらった経験はすべて今の自分につながっている。

私がラトビア語の教科書を出版した際、迷わず加藤さんに献本した。拙書が届いたであろう直後に加藤さんは電話で私を祝福してくれた。電話越しの加藤さんはただただ「おめでとう、本当におめでとう」と言ってくれたのだが、それは涙声だった。自分の成長を学生時代から社会人になるまで見守り、教科書の出版を泣いて喜んでくれた人も、自分のことを「天使」と呼んでくれた人も、加藤さん以外にはいない。

京都大学
准教授
堀口大樹

加藤さんを偲んで

佐藤 拓

私をラトビア音楽の世界へ誘ってくださった加藤さんとの関係は、そもそも早稲田大学グリークラブの大先輩としての出会いが最初でした。2002年、早稲田グリーはフィンランド・バルト三国への演奏旅行を敢行しましたが、ラトビア公演の実現に向けて様々な手配をお手伝いくださったのが加藤さんでした。当時私は学生指揮者で音楽面の担当をしていたため、加藤さんと実務的なやり取りをすることはほとんどなかったのですが、それでも加藤さんは私のことを覚えてくれていたようです。

2009年に日本ラトビア音楽協会が初めての「ラトヴィア音楽祭」を開催した際、加藤さんからのご指名でラトビア語の独唱曲を数曲披露しました。まだ駆け出しの、実績もない一音楽家にステージの一部を与えてくれたことに、今となっては大きな恩義を感じます。

2013年の歌の祭典の後から合唱団ガイスマの指揮者として迎えられましたが、その当時のガイスマはまさに風前の灯で、祭典直後の練習には団員が3人しかいないこともありました。いろいろすれ違いや思惑のズレがあったのだろうと思います。それでも、加藤さんと民子夫人のラトビア音楽への情熱に絆されてなんとかこの団体を存続させていこうと粘り続けてきました。合唱団ガイスマが、ラトビアの音楽と文化を愛好する人々の集う場所として、明確にその立ち位置を定めることができたのも、そういった苦難の時代があってこそでした。

2023年の歌の祭典は、前年にお身体の不調を理由に退団されてしまったため、初めて加藤さんのいないラトビア遠征となりました。しかしそれは一方で、加藤さんが長年築いてこられたラトビアとの友好の縁の深さを改めて実感することとなり、これからはガイスマがその縁を未来へ繋いでいくことを決意させるきっかけにもなったのでした。

加藤さんはまさに「豪腕の人」でした。それゆえに孤独な思いもされたかもしれません。しかしその豪腕によって拓かれたラトビアへの道を、今ではたくさんの人が喜びとともに歩んでいます。私も、その一人です。

合唱団ガイスマ指揮者
佐藤 拓

我々の時代「あれもこれもが走馬灯のように…」
加藤晴生（昭和 37 年卒）

（「輝く太陽」歌い続けた一世紀～早稲田大学グリークラブ百年史 2007 年 9 月 20 日発行）

1958 年 4 月、我がグリークラブには 130 名を越える新人が入部した。男声合唱が好きで高校時代から早稲田のグリーに憧れていた者から、単に大きな大学の中での孤独感を癒すための者まで、さまざまな動機で入部してきた人たちであった。記念会堂脇の少し高い所にあった高等学院の旧教室を 1 年生だけで 4 室も占領してピアノがないので音叉だけを頼りに練習したことも今では懐かしい。

最初の行事は、日本で初めて開催されたアジア大会の開会式と閉会式への参加。次は合唱祭を経て共立講堂での六連であった。幕が開き、ステージから溢れんばかりの大編成の我がグリーを見た客席から、何とも言い表しようのないどよめきが起こったほどの、一団体としては大人数のステージであった。当時グリーの指導者であられた磯部氏や 4 年生達は、「来る者は拒まず」という早稲田の伝統を踏まえ、アマチュア合唱団の在り方を大きなスケールで考え、実践されていた様に思われる。私たちはそんな素晴らしい先輩たちにも恵まれ 4 年間グリーライフを楽しむことができた。

我々の時代・1961 年 (昭和 36 年) のグリーは、前年 12 月に発表されたアメリカ遠征の準備で幕開けとなった。当時は「トリスを飲んでハワイへ行こう」の懸賞コピーが大はやりしていたが、海外旅行は自由化されておらず学生の海外演奏旅行などはまだ“夢のまた夢”の時代であったから、このタナボタ的な計画をどの様に手を付けたらいいのか皆目見当がつかず、ただ右往左往するばかりであった。結局この計画は立消えになったが“近い将来、我々には必ず海外演奏旅行のチャンスが来る”という「夢」と、実現へのある種の「自信」を与えてくれた。しかしこの騒ぎで恒例の春の演奏旅行を中止せざるを得なかった。担当マネージャーは地方公演キャンセルの対応に追われた。

この年、六連、四連は夫々 10 周年を迎えた。とりわけ、四連に対しては、各校現役、OB 共、思い入れも一入であった。会場は新しくできた東京文化会館。アマチュアの演奏会としては初めて使用される。この機会に四連演奏会を日本一のジョイントコンサートにしようとの意欲がみなぎっていた。一つの演奏会としての形を作るためにも各校のステージ数を従来までの 2 ステージから 1 ステージに絞り、それ迄ややもするとお祭り的で軽くみられていた合同を充実させようと木下保先生に「枯木と太陽の歌」をお願いし、2 台のピアノ伴奏付きで演奏した。　早稲田は山本健二氏 (昭和 31 年卒) の指揮でヘーガー作品 4 曲を取り上げた。この難曲群をものにするには完璧な発声のマスターを含め大変な努力が要求された。午後 2 時から夜 10 時迄。運動部顔負けの練習。定まった練習場のない我々は奉仕園からヘレンケラー協会へなど。1 日に 2 ～ 3 か所を渡り歩くこともしばしばであった。演奏は大成功であった。当時、毒舌をもってなる福永陽一郎氏も合唱雑誌の批評の中で「ヘーガー 4 曲は聴く方も大変だったが、これほどのヘーガーの演奏は当分聴けないであろう」と絶賛した。

翌年、OB の稲門グリークラブが、この中の“In den Alpen”長沢護氏 (36 年卒) の指揮により第 15 回全国コンクールに於いて全ての賞を総ナメにしたのは今でも OB の語り草になっている。また四連で演奏した“Totenvolk”(挽歌) は’62 年 4 月 1 日、当時 NHK の最新技術を駆使し主として世界一流のオーケストラ演奏家等が出演するステレオ人気番組“立体音楽堂”(毎週日曜日 11:00 ～ 11:50am で放送された。この他に磯部俶氏の指揮で「ふるさと」「最上川舟歌」他も同時に放送された)。この番組は 1954 年に開始されたがアマチュア合唱団の演奏が放送されたのはおそらく早稲田グリーだけではなかろうかと思っている。

米国ケネディ大統領のピースコープ (平和部隊) 政策の一環として、7 月に来日したハーバード大学グリークラブは我々に新風を吹き込んでくれた。当時、我々には難行苦行を克服してでも高度な音楽

を身につけようという風潮があり、時には合唱の殉教者のような面もあったのではないかと思われるが今振り返ってみるととにかく明るく楽しみながら合唱する彼らの姿はとても新鮮に見えた。

秋のコンクールはヘーガー作品中の最難曲“Walpurga”を選び、練りに練り上げて臨んだが、結果は5人の審査員のたった1人が20点という大差のマイナスをつけたために僅差で2位に甘んじた。

思えば58年には関東で1位にこそなったが「ゴートの兵士」という戦争を題材とした選曲をけしからんという審査員がおられたこと、59年に「最上川舟歌」の豊かな曲想を堂々と表現して、審査員のみならず並居る他出場団体の聴衆をも圧倒的に魅了したとまで主催者から絶賛されながら、審査員の中から”日本民謡に芸術性などない、合唱コンクールの自由曲とする見識を疑う”との意見が出、苦汁をなめさせられたことなどが度重なり、クラブ内がこのコンクールについてかなり懐疑的になってきていた。

つまり、勝ち負けが客観的に判別できるスポーツと違い、音楽は主観的瞬間的芸術であり、演奏者の主観と審査側の主観とがぶつかった場合、相乗的に評価の偏りが増幅し易い、だから競技(コンクール)と考えるには限界があるのではないか…、という主旨だったと思う。

後輩の新4年生は、我々との引き継ぎの際、翌年コンクールにも一応参加する方針を打ち出していたがその後、結局不参加とした。これらの議論が彼らをしてそうせざるを得なかったのだと思っている。

結局、早稲田グリークラブのコンクール参加はこの年我々の代で終わったことになる。その後関学、および同志社の常連有力校が相次いで参加を辞退し、合唱コンクールのあり方も変わっていった。

定期演奏会は「ヘーガー」「シューベルト」の作品に、清水脩氏の新曲「富士山」と「Negro Spirituals」による意欲的なプログラムを組んだ。会場「共立講堂」(定員2010名)は2日間とも超満員となりダフ屋も出る程の盛況であった。

とにかく慌ただしく忙しい1年であった。特にヘーガーに取り付かれ、追いまくられた、良きにつけ悪しきにつけ青春をグリーと共に燃焼し尽くしてしまったという思いは今も残っている。

「草の根国際交流」
第5代幹事長　加藤晴生（昭和37年卒）

（「輝く太陽」稲門グリークラブ50年史 2003年9月12日発行）

なんて無謀なクラブであろうか。92年5月、私達は、1年半もかけてやっと翌年5月の使用内諾を得たカーネギーホールを断って、何の知識も持たないバルト行きを決めた。理由は単純、米国で激しいジャパンバッシング。「団体で出かけて事故でも起きたら…。」それより「人間の鎖」「うたの革命」等武器に頼らず、圧政から自らの解放を果したバルトへ行こう。近くには合唱のメッカ、フィンランドもある。

何とか伝手を頼って訪れたヘルシンキで松原千振氏に会った。「ヘルシンキコーラス(YL)は76年訪日でワセダに世話になった。今度はこちらで私がやります。心配なく。」氏は翌日沢山の楽譜をもって空港へ来てくれた。

翌年バルト・フィンランドへ。第1日目はラトヴィアのリーガ。ジンタルスは「赤とんぼ」で私達を迎えてくれた。その情感、音のすばらしさは日本でも聴いたことがない。「頭をあげて下さい、お母さん」の見事なアルトソロ。もうここでメロメロ。二度目の訪拉は文化大臣の招聘で同国の「歌と踊りの祭典」に参加。壮大なスケール、幽玄ともいえる美しさはこの世のものとは思えなかった。

私達の海外演奏旅行は稲門グリー主催だけでも訪問先は 11 か国、17 都市にものぼる。こんなに数多く出かけたが事故は一度もなかった。今や草の根文化交流は稲グリ活動の主要な柱になっているといえよう。

私達の旅行はいつも「時」に恵まれた。ゴルバチョフ政権が全盛で世界の目がすべてソ連に向けられていた 90 年、モスクワのコンセルヴァトワール、レニングラード (現サンクト・ペテルブルク) のカペラホールで公演ソ連が誇る 500 年の伝統を持つレニングラードアカデミーとの協演、この旅行から稲グリが得たものは計り知れない。治安が心配されたカイロ公演も無事故だった。カイロオペラハウスの美しさも忘れ難い。10 年に一度の日本文化紹介行事 JAPAN2001 の初日をロンドンで飾った。私達の演奏旅行はいつも現地のメディアの話題にもなった。全国に TV・ラジオで生放送されたり、新聞では「日本の企業戦士は働くだけではない…」「これが平均 60 歳の合唱団」等々。

私達は訪問先との付合いを一回限りにしてはなるまい。いつまでもワセダらしくいろいろな世界にも大きく展開する稲門グリーであってほしいと思っている。

合唱大国ラトビア賛歌　－演奏旅行で訪問、歌声の交流続く－

加藤晴生（会社役員）

（日本経済新聞「文化欄」2003 年 4 月 18 日）

「ヤパーナ、ワセダ・トーモン・グリークラブ！」。ここはラトビア共和国の首都リガにある野外大音楽堂。合唱祭「ラトビア歌と踊りの祭典」のステージだ。私たちを紹介するアナウンスが響きわたり大きな歓声で迎えられた。

早大 OB のクラブ

ラトビアはヨーロッパの北東、バルト三国の一つ。知る人ぞ知る合唱大国だ。五年に一度開く合唱祭は国民的な大イベントになっている。ステージには全国から選ばれた二万人の大合唱団がズラリと並び数万人の聴衆が駆けつける。

私たち早大グリークラブの OB でつくる合唱団「稲門グリークラブ」は一九九三年、演奏旅行で初めてラトビアを訪れて以来、合唱を通じた交流を重ねてきた。ラトビア最高峰のアマチュア女声合唱団「ジンタルス」の来日公演も、二度にわたって実現させた。

冒頭に紹介したのは九八年七月四日、合唱祭に参加した時の思い出のシーンだ。二万人をバックにラトビア民謡や「威風堂々」「ハレルヤ」などの名曲を歌った。緊張もしたが、大地から立ち上がる人々の声に包まれるようで、すーっと気持ちが安らいだ。

祭典は午後六時、北欧特有のまだ高い太陽の下で始まって、延々と四、五時間も続く。終演後も自然にできた人の輪から歌声が絶え間なく続いていく。声を合わせて歌う楽しさを国民一人ひとりがよく知っていて、心から楽しむ姿を見るとうらやましくなる。

初めてラトビアを訪れた九三年の演奏旅行は当初、米ニューヨークのカーネギーホールを予定していた。使用許可も得ていたが、私の判断で行き先をラトビアに変更したのだった。

八九年にテレビのニュースで見た光景が忘れられなかったからだ。バルト三国の人々が手をつないで六百キロメートルにも及ぶ「人間の鎖」をつくり、旧ソ連からの独立をアピールする映像だった。大規模な歌の集会も開かれていた。非暴力を貫き、歌いながら自由を勝ち取った姿に共感した。

湾岸戦争後で日米関係がぎくしゃくしていた時期でもあり、思い切ってラトビア行きを決めた。
体制が安定しない時期だったため、訪問の準備はなかなか進まなかった。打ち合わせのファックスを送っても返事は手紙で来る。相手の電話番号もたびたび変わるといった具合だ。ラトビアの歌を原語で歌うため、土日も返上で練習した。

女声合唱団を招く

93年4月、私たち一行百八人がリガ空港に降り立つと、共演するジンタルスの面々が民族衣装で出迎えてくれた。私たちはラトビア国歌を歌ってこたえた。日本の合唱団が訪れるのは独立後初めてとあって、現地のマスコミも大きく取り上げていた。
リガ市中心の大ギルドホールでコンサートを開いた。ジンタルスは数曲を披露してくれた。日本語で歌った「赤とんぼ」はじめ、透明感と情感を兼ね備えたハーモニーには神々しさを感じた。四七年に女声合唱団として発足したのは、スターリン時代に男たちがシベリアに抑留されたためと聞き、大国にほんろうされたこの国の歴史に思いをはせた。
ラトビアの合唱団を日本に紹介する活動にも力を注いでいる。九六年にジンタルスが浜松市の音楽祭に参加したのをきっかけに、東京都と千葉市、山梨県白根町での演奏会も実現させた。
舞台裏は順風満帆とはいえなかった。予定していたラトビア企業の支援が急に得られなくなり、合唱団の仲間から寄付を募って資金を賄った。しかしコンサートの出来栄えは上々で、二〇〇一年にも再来日公演を成功させた。
人口二百三十万人余りのラトビアは、国民の大半が「生涯に一度は合唱団で歌う」といわれ、リガ市内には六つのプロ合唱団がある。加藤登紀子さんのヒット曲「百万本のバラ」は、ライモンド・パウルス元文化大臣の作曲だ。

「歌の民」の祭り

ラトビアで歌を意味する名詞「dziesma」は「生きる」「生まれる」という動詞の派生語。まさに「歌の民」だ。ラトビアとの交流で、歌うとは生きることだと教えられた。
今年は五年に一度の合唱祭の年に当たる。七月に向けて、そろそろお祭りムードが盛り上がってくるころだ。男性は樫の葉の飾りを頭にかぶり、女性はオレンジや茶色のベストとエンジ色のスカートの民族衣装に身を包んでスミレやシラカバなどの花で全身を飾る。
今回はステージには立たないが、六月下旬からラトビアを訪れ、合唱祭を視察する。ジンタルスの面々との再会が楽しみだ。またこの歌姫たちを日本に招き、美しい歌声を紹介したい。

「五十周年事業のこと」
実行委員会　加藤晴生

（「輝く太陽」稲門グリークラブ 50 年史 2003 年 9 月 12 日発行）

実行委員長就任について打診があったときクラブには人材も豊富だし今更私が先頭に立って旗を振る必要もあるまいと断るつもりでいました。しかし、新しい時代の胎動を育むためにクラブが手伝いを必要とするなら断る理由もないと“レストランのコックは客席に出ないこと”を肝に銘じてこの任を引き受けました。

コンセプトはありきたりですが”全員集合”。クラブの原点です。五十年間、クラブの内外を問わず力を貸して下さった方々への感謝。これはさらりとやりたい。

委員会の委員は原則として自発的な応募者 (勿論、こちらからお願いした方もいる)、五十周年を機会にクラブとしてやって置くべきことは何でも取り上げる。期間は一年、事業関係は最長 2007 年までと決めました。

このプロジェクトの規模を大雑把に 1500 万円と見積もってスタート、行事関係は昨年 12 月の記念祝賀会をもって終了しました。各行事とも今までになく心遣いが行き届いていたと思います。採算的にも満足できる結果であり、反省点も多々ありますが、少なくとも対外的には成功したといえるでしょう。記念演奏会は現役を含めたトータルグリー 1400 名の中 350 名がオンステ、率にして 25%。この種の団体の集まりとしては高いレベルの数字です。祝賀会は 450 人以上出席、来賓も各界から広くご出席いただき盛大でした。これに二つの行事について外部の方から”早稲田大学の伝統と歴史を感じメンバーがその生き甲斐をクラブに託している姿に感動しました”との便りを頂きました。私達は稲グリのメンバーであることに誇りをもっていつまでも多くの人々の期待にも応え得るよう、より一層の努力をしなければと思った次第です。私自身クラブとは長くかかわってきました。その間数々の難問もありましたが、それらの解決には多くの方々からご助力を頂きました。これらの方々に私達の感謝の気持ちがうまく伝わったかどうかは分かりませんが、この機会に私なりに意を尽したつもりです。

事業関係では五十年史がやっと完成しました。実質一年間で 50 年分の資料を集め作成したのですから大変でした。記録係の必要性を痛感しました。伝統とは数字と克明な記録の積み重ねだと思います。多くの協力者を得ながらも、実際の作業などは仕事の性格上殆ど一人で行わなければななかった穎原信二郎君に相当な負担をかけました。同君の尽力に感謝します。現役グリーの音源確保のプロジェクトは 4 年後の現役グリー創立百周年まで続く仕事です。母校 125 周年記念募金活動は順調に進んでいます。母校は私達の拠って立つところです。これらの事業はそれぞれ 2007 年まで続けられます。引き続きご協力をお願い致します。

以上にて五十周年事業の総括とさせて頂きますが本事業を推進するにあたり、御指導、御協力を戴きました多くの関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

協会設立の経緯と果てしなく広がる夢

専務理事　加藤晴生

（日本ラトビア音楽協会ニュース 第１号 2004 年 12 月 10 日発行）

永年の夢でもありました日本・ラトビア音楽協会が、発起人の方々や新しく会員になられた皆様のご理解とご協力により､9月17日無事にスタートいたしました。皆様のお力添えに心より感謝いたします。

今後ともこのプロジェクトを成功されるよう尽力する所存ですので、あらためて当協会発展のためによろしくご支援をお願いいたします。

私が初めてラトビアを訪れたのは 92 年です。そして 93 年 4 月にリーガで演奏会を開きました。以後私の屬している稲門グリークラブや早稲田グリーの同国との交流を通じ、このバルトの小国がすばらしい合唱大国であり、またクラシックの分野でも興味ある歴史をもち世界的に著名な音楽家を数多く輩出していることも知りました。ポップスについても然りです。

一方、我が日本の音楽会も隆盛を極め、国内のみならず海外でも多くのアーチストが大活躍中です。クラシック関連の演奏会は年に一万回におよびます。合唱音楽も戦後著しい発展を遂げ、新しい優れた作品が次々と発表され、今や日本を代表する一つの文化を形成するにいたっています。

こうした背景のもとに、96 年に来日したアマチュア女声合唱団“ジンタルス”の衝撃的な演奏がきっかけになって、合唱交流協会をつくろうとの話がもちあがりました。あれからほぼ 10 年、話はあっても実現までの道はほど遠いものでした。

今回設立を決意したのは、このプロジェクトの実現を望んでおられた辻正行氏や後藤田純生氏が相次いで亡くなられたこともひとつの理由です。いつまでも先延ばししているとこれまでの努力が無に帰してしまう。とにかく形だけでもつくろうとの声にもおされました。約 60 名の方に発起人引受けの依頼状を出しました。断った方は数人でした。協会を発足できると判断しました。この結論が出たのが 8 月になってからでしたので今も何かとドタバタしています。

協会の名称を日本・ラトビア音楽協会としました。合唱交流協会などの案もありましたが、国際交流を目的としていますから活動にフレキシビリティをもたせるには特定分野の音楽に限る必要はない。さらにこの協会が将来、日本とラトビア間の音楽情報の起点にしたいとの考えが主な理由です。

当協会では会員相互のきずなを強めつつ音楽を通じて日・ラ間の相互理解を深めることに関するごとを出来るだけ多く取り上げたいと思います。ただし、その運営は一方的な片道通行にならないように配慮しなければならないでしょう。

出来立ての協会ですのでまだ手探りですが、ラトヴィアの演奏家・合唱団の招聘、指揮者の派遣、会員による講演会の開催などを検討しています。

いま協会にとっての重要なテーマは広報です。当協会の発展は会員の増加にかかっていますが、とりあえず来年 3 月までに 100 名にしたいと強く願っています。皆様のお知り合いなどで当協会に関心をお持ちの方がおられましたら是非入会を勧めてください。

未だ来日したことのない世界のプリマドンナ、イネセ・ガランテさんなど有力演奏家もお呼びできるような協会にすればすばらしいと思います。夢は果てしなく広がります。

熊谷会長とご相談の上、2 月 5 日に第 1 回総会を開催することにいたしました。今後の事業展開について会員の皆様から建設的な意見を頂き、楽しい懇親の時を持ちたいと願っています。多数ご参集いただきますようお願い申し上げます。

ラトビア最新情報
当協会に大きな期待を寄せられていることを実感しました
専務理事　加藤晴生

（日本ラトビア音楽協会ニュース第３号 2005 年 11 月 20 日発行）

当協会は去る９月に一周年を迎えました。

私は現地側への挨拶を兼ねて早稲田大学グリークラブのバルト演奏旅行に同行、学生より一日早く10 月９日にリーガ入りしました。空港には深夜にも拘わらず、カッタイ先生、ジンタルスの指揮者アイラさん、６月まで日本で活躍していたオレグさんが出迎えてくれました。空港ビルは２年前よりさらに拡充され、飛行機を降りてからイミグレーションまで結構歩かされました。

先ず感じたのは、ラトビアは急速に姿を変えていることでした。銀行の大きなネオンサイン、自動車の増加と渋滞（日本ほどではありませんが）…、かつてはなかったことです。旧市街の修復も進んでいます。

日本との交流もどんどん密になっているようです。私の到着した前日にはサッカーの親善試合があり９月末には沖縄の太鼓のグループが来訪、そして 10 月 30 日には国立劇場で能の公演があるとのことです。初めてラトビアを訪れた 92 年ごろは、日本人の来訪者は年間精々 50 人と聞いていました。

私は 92 年から昨年を除いて毎年訪問していますが、今回も多くの方々とお会いし、この国の文化・音楽関係者たちが当協会の動きに関心を持ち、大きな期待を寄せていることを実感しました。また、私たちの活動の実態を知り、これなら自分たちもスタートできるとの思いを持った様で、ラトビア・日本音楽協会の実現も遠い話ではないとの感触を得ました。

学生たちの演奏会はいずれも満員の盛況、特にラトビア人協会での演奏会には音楽界の錚々たる方々がお見えになりました。その中には自らも合唱経験を持つベルジンシュ前首相もおられました。グリークラブは期待をはるかに超える演奏をしてくれて客席からブラボーの連呼、現地の人々は日本の歌を堪能してくれたと思います。天候にも恵まれ充実した旅行が出来たと思っています。

来日経験２回の同国を代表するアマチュア女声合唱団ジンタルスは元気いっぱい健在です。今回もグリークラブの受け入れに協力してくれました。2007 年には創立 60 周年を迎えますが、海外の友好団体を招く計画を立てています。同年には世界合唱フェスティバル開催の計画もあります。2008 年の歌の祭典の具体的なプランは11 月には決まる見込みです。また、同国が生んだプリマドンナ、イネサ・ガランテ来日の話もあります。両国の音楽の紹介、指揮者、演奏家をはじめ両国民の文化的交流等など夢は実現に向けて動き始めたようです。

リーガ大聖堂合唱学校を訪問

翌 10 日朝、カッタイ先生と共に、まず来年１月に松原千振氏が日本の歌を指導するリーガ大聖堂合唱学校を訪ね、ヤーニス･エレンシュレイト校長先生や、音楽監督兼指揮者のアイラ･ビルジーニャ女史などと面談しました。教室に行くとマスタークラス 25 ～６人の少女たちが待っていてくれました。束を貫い、素晴らしい合唱を聴きました。アルトがよく響き、ジンタルスが初来日した時、日本のファンに衝撃を与えたことを思い出しました。

この学校は１年生から 12 年生までの小中高一貫教育校で、生徒数は 180 人。音楽の他、一般教科も怠りなく指導しています。もちろん音楽文化に重点を置いていますが、どこの大学にでも進めるよう一般の学校と同じような教育を行っています。実際、数学、物理学の優秀な生徒もいました。

合唱学校は歌うだけではなく、ピアノ、バイオリンなどの楽器も必修です。最近はサクスフォンが人気とか。私の前で、コンクールに入賞した 7 年生と 8 年生の 2 人がサクスフォンを演奏してくれました。声楽部門で入賞したというソプラノの少女はとても立派な声でした。子供たちはコーラスを学ぶだけではなく、オペラに出演したり、国賓の前で歌ったり、海外演奏旅行にも出かけます。

今年からジャズのコースも誕生し、世界ジャズ学校連盟にも加盟しました。ラトビアでは初めてのことだそうですが、トップ級のジャズマンを招待して指導を受け、子どもたちに大変人気があるようです。

松原千振氏が指導する日本の曲の練習も始まっていましたが、子どもたちは”日本語の発音に違和感がなくなった”と話していました。

その後も話が弾み、日本と交流を深めたいという大きな期待を強く感じました。

文化大臣らと面談

女性文化大臣のエレーナ・デマコヴァ氏とは 11 日に会いました。今ラトビアで最も人気のある大臣です。予算会議で超多忙の中、時間を割いてくれました。二国間の文化協力は民族間の理解を深め経済協力の基礎になる大切なことと当協会を評価しました。今はまだ日本にラトビアを代表する機関がないが、大使館が出来たらいろいろな活動が始まると話していました。

※文化大臣との面談は、当地のニュースエージェンシー「LETA」にも紹介されました。熊谷会長のメッセージに丁重な返事も頂きました。

作曲家連盟のウギス・プラウニス会長は、ご自身の作品が日本で演奏されたこともあり、日本と欧州との文化交流の歴史を説きながら、当連盟の今後のあり方、展開について話してくれました。日本の作曲家たちがどんどん立ち寄って、連盟内の小さなホールで演奏してほしい。外国の専門家にラトビアの若者を接触させたいとのことです。古典から現代音楽、アニメ、舞踏、更に陶器にまで話が及びましたが、中でも音楽学関係の人材交流を強く期待していました。作曲家連盟の会員数は 104 名作曲家と音楽学者が各々半々です。

帰国後、作曲家連盟会長から次のメールを頂きました。

「加藤様　ラトビア音楽連盟で貴方とお目にかかれた喜びの気持ちをもう一度お伝えしたいと思います。私たちは建設的な話し合いをしたと思います。そして、その後の (早稲田の) 演奏会は私たち両国と音楽家たちの本当の友情を示した素晴らしいものでした。音楽協会の将来の展開について素晴らしいお考えを話していただきありがとうございます。将来共同で仕事が出来ることを楽しみにしています。ウギス・ブラウリニシュ」

滞在中、アイナ･カルンツィエマ : ラトビア音楽アカデミー教授 (バッハ協会会長)、ヤニーナ･ティシュキナ : 文化省国際関係部長、ヤングリダ・レイマンドヴァ : 外務省アジア・アフリカ・大洋州部上級デスクオフィサー田中亨 : 在ラトビア臨時代理大使、グナル・リュングダール : リーガ経済大学副学長、アルマンズ・ラピンシュ : ラトビア音楽アカデミー副院長ら多くの方々、アンドリス・ベルジンシュ : 前首相にお目にかかりました。バルトを知るための旅行とか、楽譜の発行とか様々な提案に対処するため、旅行会社や出版社にひと通り挨拶に伺いました。落ち着きましたら一つ一つ検討します。

旅行を終えて「歌と踊りの祭典」視察旅行団
団長　加藤晴生（専務理事）

（日本ラトビア音楽協会ニュース第 13 号 2008 年 8 月 25 日発行）

今年はラトビア独立 90 周年。今回の「歌と踊りの祭典」の参加者は史上最高の 38,601 人。旧ソヴィエト体制からラトビアの独立回復への移行期、ラトビア国民のエネルギーを大爆発させた 90 年の熱烈祭典を上回る規模で行なわれました。

私たちのリーガ滞在は実質 3 日間という短い期間でした。その間、心配された夜間の野外会場での寒さや降雨もなく、天気に恵まれ歌と踊りの祭典を興奮と感動をもって満喫、また日本大使館のご好意による大使館当協会共催レセプションとラトビア外務次官ペンケ夫妻共催による、この二つのレセプションを通じラトビアの人々との交流や彼らの当協会に対する期待の大きさを改めて実感するなど実り多い数日を過ごしました。

祭典の時期はラトビアの音楽関係者たちにとって非常に多忙なので、はたして私たちのレセプションにどの程度集って貰えるのか不安でしたが、当日はパブリスク前外務大臣 (現ラ･日議員連盟会長)、外務省、文化省音楽関係者はじめ幅広い分野から私たちの人数を上回る参加者が集まり、当初予定した 100 名規模のレセプションができました。とりわけラトビア音楽アカデミーからはシーマニス院長はじめ副院長や教授など要職者 7 名が出席されたことには私なりに責任の重さを感じました。作曲家協会会長プラウリンシュ氏、ガルータ財団ポルマ女史、今年 12 月リーガ大聖堂少年合唱団を日本へ送り出すリーガ大聖堂合唱学校のエレントレイツ校長夫妻 (歌の祭典の名誉指揮者)、この秋来日予定のピアニストのソルペイガ・セルガさん、日本語スタジオ「言語」のブリギタ・クリーミヤさんなども見え、私の心配は杞憂となりました。幅広い分野からの集まりの中で、協会設立にラトビア側で貢献されたエドガルス･カッタイ氏 (ラトビア科学アカデミー名誉博士)、アウスマ･デルケーヴィッチャ女史 (指揮者)、およびアイラ・ビルジーニャ女史 (指揮者) の三人に対し、藤井会長名で感謝状と記念品を贈呈しました。デルケーヴィッチャ女史は欠席されたのでジンタルスの幹事長ダッチェ・アダムソンさんに託しました。因に感謝状は日本語とラトビア語の両国語で書かれラトビア語は堀口大樹氏によるものです。

大使館でのレセプションは言葉も通じにくい初対面同志の集まりなのでどのように盛り上げようかと考えていましたが、なかなかこれという案が出ませんでした。そんな折、妻からせっかくラトビアへ行くのだからラトビアの歌を覚えたいと云われました。彼女が所属する合唱団からの参加者も歌いたいとのこと。これがヒントになり、ラトビアの人が好む歌を歌えば場が和むだろう。練習が出来なくて下手でも構わない。批判は覚悟のうえで、レセプション開始の合図に「私の祖国は小さいけれど」をいきなり歌うことにしました。この他に「風よ　吹け」と日本の歌を含む 5 曲の譜を用意してあとは成り行きに任せることにしました。指揮は会員の工藤悠一郎氏と赤池喜代さんにお願いしました。この案は上手く行ったようです。私が招待客の応対で会場を離れている間にラトビア人たちも歌いだし、日・ラ歌合戦のようにまで盛り上がったとのことです。会場に戻ってみると確かに和んだ雰囲気が漂っていました。現地新聞によると当協会にはメンバー 50 名ほどの合唱団があり、4 回訪ラしていることになります。そのように紹介された以上、実際に「ラトビアのうたを歌う会」を作らなくてはと思っています。また、新聞は「外務省は彼らに歌の祭典クロージングコンサートを見る機会を見つけた。これは遠く離れた日本でラトビアの文化を促進していることに対する報い (報酬) である。」とも報じました。年が明けてから私にとって最も厳しい仕事は二つの祭典の入場券確保でした。それも何とか解決できて祭典の見学が実現したことを嬉しく思っています。

外務省ペンケ次官夫妻主催のレセプション会場で次官夫妻に挨拶をしました。次官はにこやかに「あなたたちの協会のことは詳しく知っています。」このレセプションに招待されることは出発間近になって大使館から知らされました。その時は少人数が招待されるとのことでした。直前になって、「全員が招待されます。当日はバスを用意するので 18:00 までに外務省の前に集まって下さい。雨合羽を用意するので傘は持たないように。招待状はラトビアについてから渡します。」との連絡がありました。招待状は各人宛の正式なものでした。当日集合場所へ行くとパトカー3台が交通整理をしていました。私たちは早めに着き、グループも大勢でしたので自然に全員が一号車に乗りパトカーの先導で会場へ向かいました。バスは 5 台用意されました。このレセプションに招かれたのは各国大使や外国からの VIP 達でした。誰が仕掛けたのかわかりませんが私たちにとっては素晴らしいプレゼント、「サプライズ」でした。

今回の旅行は年長者が多かったのですが皆さん自己管理が上手な方たちばかりで全員が元気で楽しく終えられて心よりよかったと思います。アンケートで旅行期間を 8 日間と 10 日間に分けて希望をとったので各人のスケジュールに合わせて参加できたこと、ウイーンでの観光も夫々自分で行きたいところへ行けるよう自由行動を基本としたので自分なりの旅行が楽しめたこともあって、この旅行が充実したものになったと思っています。

皆様、ご協力ありがとうございました。また、この旅行をご支援くださったヴァイヴァルス駐日ラトビア大使閣下及び同大使館の皆様並びに岡田駐ラトビア日本国臨時大使様及び同大使館の皆様をはじめこの旅行に関係された皆々様のご支援とご協力に心より厚く御礼申し上げます。

私たちの協会は間もなく創立 5 年目に入ります。これを機に今回の旅行で感じ取ったラトビアの方々の気持ちを大切にして末永い友好関係を深めるために、一層充実した協会となるように努力していきたいと思います。今後とも皆様のご協力をお願い申し上げます。

加藤晴生さんの略歴

西暦	年号	月日	項目（ ■職歴／■早稲田関係／■ガイスマ関係）	備考
1937	昭和12年	1月24日	出生	
			東京都立向丘高卒業	
1958	昭和33年		早稲田大学入学、グリークラブに所属	
1961	昭和36年		早稲田大学グリークラブマネージャー	
1961	昭和36年	7月9日	ハーバード大学グリークラブとの交歓演奏会	東京文化会館大ホール
1961	昭和36年	7月29日～8月18日	西日本演奏旅行(17都市25ステージ)	
1962	昭和37年		三井物産株式会社鉄鉱石部入社	
1968	昭和43年		インド・ニューデリー支店へ長期出張(9か月間)	
1970	昭和45年		オーストラリア・パース支店へ転勤(マウントニューマン鉄鉱石)	
1974	昭和49年		東京本店鉄鉱石部へ帰国	
1978	昭和53年		早稲田大学グリークラブOB会(以下OB会という)部報係	
1980	昭和55年		OB会演奏会委員	
1980	昭和55年		南アフリカ・ヨハネスブルク支店石炭部へ転勤	
1984	昭和59年		東京本店石炭部へ帰国、宇宙航空機部へ(航空機国際営業部)	
1985	昭和60年		OB会常任幹事マネージャー(マネージャー)	
1986	昭和61年		OB会常任幹事マネージャー(海外担当)	
1986	昭和61年	5月1日～5月5日	台湾訪問親善演奏会	
1987	昭和62年		OB会常任幹事マネージャー(企画)	
1988	昭和63年	～平成4年	OB会幹事長	
1990	平成2年	4月29日～5月6日	日ソ文化交流・ソビエト連邦演奏旅行	幹事長:加藤晴生
1993	平成5年		OB会常任幹事《マネージ部門》(企画)	
1993	平成5年	4月28日～5月5日	稲門グリークラブ 北欧3国演奏旅行	団長:加藤晴生
1993	平成5年	4月29日	リガフィルハーモニックホール演奏会	女声合唱団ジンタルスと共演
1994	平成6年		OB会常任幹事(企画)	
1995	平成7年		OB会常任幹事(企画)海外演奏旅行委員	
1995	平成7年	4月28日～5月7日	イタリア・エジプト演奏旅行	副団長・総括:加藤晴生
1996	平成8年		OB会企画担当	
1996	平成8年		女声合唱団ジンタルス来日[指揮:アウスマ・デルケーヴィチャ]	
1996	平成8年	7月21日	ジンタルス来日歓迎レセプション	ホテルイースト21東京
1996	平成8年	7月22日	ジンタルスの演奏会に稲門グリークラブが賛助出演	北とぴあさくらホール
1996	平成8年	7月29日	ジンタルスさよならパーティー	ホテルイースト21東京
1997	平成9年		三井物産株式会社退社し三井物産エアロスペース株式会社常務取締役	
1998	平成10年	～平成12年	OB会副会長	
1998	平成10年	6月28日～7月7日	稲門グリークラブ ウィーン／ラトビア演奏旅行	団長:加藤晴生
1998	平成10年	7月3日	ジンタルスメンバーとの交歓会	野外民俗博物館
1998	平成10年	7月4日	ラトビア歌の祭典に参加	
2001	平成13年		OB会幹事(英国演奏旅行委員会委員長)	
2001	平成13年	4月28日～5月6日	英国演奏旅行	団長:加藤晴生
2001	平成13年	10月15日	ジンタルス来日歓迎レセプション	霞ヶ関三井クラブ
2001	平成13年	10月17日	ラトヴィア共和国独立10周年記念・ジンタルス東京公演に東京稲門グリークラブが賛助出演［指揮:アイラ・ビルズィーニャ］	ティアラこうとう大ホール
2002	平成14年		三井物産エアロスペース株式会社退社、平成ビジネスアソシエーツへ	
2002	平成14年		OB会幹事(企画・OB会創設50周年記念事業)	
2002	平成14年	2月11日～2月23日	早稲田大学グリークラブ フィンランド・バルト三国演奏旅行に随行	
2002	平成14年	2月18日	早稲田大学グリークラブ&ジンタルスジョイントコンサート	Latvia University Hall
2004	平成16年	9月17日	日本ラトビア音楽協会設立発起人会	日本プレスセンター記者クラブ
2005	平成17年	2月5日	日本ラトビア音楽協会第1回総会兼懇親会	霞ヶ関三井クラブ
2005	平成17年	10月10日～10月19日	早稲田大学グリークラブ ラトビア・リトアニア演奏旅行に随行	
2005	平成17年	10月11日	早稲田大学グリークラブリガ演奏会	ラトビア人協会大ホール
2006	平成18年	4月20日	ラトビア共和国在日大使館開設記念レセプション	帝国ホテル孔雀南の間
2006	平成18年	10月1日	協会主催「大使館開設とヴァイヴァルス大使を歓迎する会」	新宿三井クラブ
2006	平成18年	11月17日～11月27日	第2回指揮者交流プロジェクトとしてアイラ・ビルジニャ女史を招聘	
2008	平成20年	7月9日～7月18日	日本ラトビア音楽協会「歌と踊りの祭典」視察旅行	
2008	平成20年	7月29日	第1回大使館サロンコンサートを開催(以後十数回開催)	駐日ラトビア共和国大使館
2009	平成21年	1月1日	日本ラトビア音楽協会合唱団ガイスマ設立	初代代表:加藤晴生
2009	平成21年	7月3日	ラトビア共和国の褒章《クロス・オブ・レコグニション》受章	
2010	平成22年	9月25日	ラトビア音楽の集い(第1回ラトビア音楽祭)開催	四谷区民ホール
2011	平成23年	11月6日	第1回日本ラトビア語弁論コンクール(以後5回まで開催)	
2011	平成23年	11月12日	第2回ラトビア音楽の集い	渋谷区文化総合センター大和田さくらホール
2013	平成25年	5月19日	第3回日本ラトビア音楽祭にアイラ・ビルジニャ女史が出演	渋谷区文化総合センター大和田さくらホール
2013	平成25年	7月2日～7月8日	合唱団ガイスマが第25回ラトビア歌の祭典に招待参加	
2015	平成27年	5月23日	日本ラトビア音楽協会創立10周年記念「平和を歌の翼に乗せて」《第4回ラトビア音楽祭》	渋谷区文化総合センター大和田さくらホール
2018	平成30年	3月28日～4月3日	女声合唱団ジンタルスが来日	
2018	平成30年	3月30日	女声合唱団ジンタルス歓迎演奏会[出演:ジンタルス、桜楓合唱団、早稲田大学グリークラブ]	早稲田奉仕園スコットホール
2018	平成30年	4月1日	第5回ラトビア音楽祭　in TOKYO　～平和を歌の翼にのせて～[出演:ジンタルス、NHK東京児童合唱団ユースシンガーズ、合唱団お江戸コラリアーず、ガイスマ]	渋谷区文化総合センター大和田さくらホール
2018	平成30年	6月30日～7月10日	合唱団ガイスマがオーディションを経て第26回ラトビア歌の祭典に参加	
2018	平成30年	7月3日	ガイスマ・ジンタルス合同演奏会	文化大宮殿中ホール
2018	平成30年	7月4日	ガイスマ単独コンサート	聖アングリカン教会
2018	平成30年	7月8日	第26回歌の祭典クロージングコンサート	森林公園メジャーパーク
2019	令和元年	8月1日	日本ラトビア音楽協会専務理事を退任	
2021	令和2年	12月31日	合唱団ガイスマを退団	
2023	令和5年	12月6日	逝去(86歳)	

早稲田大学グリークラブ100年史、稲門グリークラブ50年史、日本ラトビア音楽協会ニュースなどから作成しました

主催

Koris GAISMA 合唱団ガイスマ

協賛

稲門グリークラブシニア会

特別協賛

Riga Wood Japan様

Gaišā piemiņā